

青少年くらし

家庭版

発行
倉敷市教育委員会
編集
生涯学習課
☎ 426-3845

4月



「明るい家庭づくり」作文

家庭の役割、家庭の在り方など、日頃から家庭について考えていることをテーマにした作文です。令和2年度は、小・中学校から一六四五点の応募がありました。優秀賞受賞者は次のとおりです。その中から四作品(岡山県青少年育成県民会議において優良賞)を四・五月号で紹介いたします。なお、優秀賞、優良賞は倉敷市のホームページに掲載しています。

第 福田小学校 一年 野口 佳純

赤崎小学校 三年 山下 章葉(五月号)

長尾小学校 五年 藤森 勇成(四月号)

船穂中学校 一年 岩崎 正宗(五月号)

玉島北中学校 三年 佐々木 拓智

味野小学校 一年 小山 八瑛

帯江小学校 四年 平元 心結

船穂小学校 六年 花田 桃子

新田中学校 一年 馬場 湊(四月号)

「お母さんの息」

長尾小学校 五年

藤森 勇成

「はあー。」
仕事から帰って来たお母さんの口から息がもれた。今日もお母さんはいそがしそうだ。

ぼくのお母さんは、かんご師の仕事をしている。お父さんは仕事で週末し

か帰って来ないから、お母さんと妹弟の四人で過ごすことが多い。だから、お母さんは一日中止まることなく、たくさん動き回っているのだ。
お母さんの朝は五時に起き、洗たくと朝ご飯作りから始まる。それから、弟を保育園に送って仕事に行く。帰ったらまた夜ご飯に洗たくたみ、弟のおむかえと、週六日はぼくたちの習い事の送りむかえだ。やっと弟がねて、お母さんの入ったお風呂から、

「ふー。」
と声が聞こえた。顔にブツブツも出て、体はケガしていたんだ。
ある日、仕事から帰ったお母さんの目が、赤色になっていた。きつと泣いていたんだとぼくは思った。
「だいじょうぶおれが仕事場に言に行つてあげようか?」
と言うと、お母さんはぼくをだきしめて、
「ありがとう。」
と言い、
「ふー。」
と息をはくと、またいつもの笑顔のお母さんにもどった。それを見て、仕事でもお母さんはすぐがんばっているのがわかった。
お母さんの口から、一日何回も色んな息が出る。つかれた時の「はあー」、ほっとした時の「ふー」、その息で、ぼくのお母さんのがんばったレベルがわかるんだ。
お母さんは、時々すごくこわい顔をする。大きな声でどなること



もある。おこる時までぼくたちのために一生けん命で、いそがしそうだ。おこられるのはいやだけど、いつもぼくたちがこまらないようにするためなんだと分かると、ぼくはありがたいの気持ちでいっぱいになった。お母さんががんばっているのに、ぼくたちだけががんばらないのはおかしい。だから、たくさん手伝いをして、お母さんの「はあー」をへらしてあげたいと思った。
また、朝が来て、お母さんはいそがしそうだ。お母さんとぼくの気持ちがあ合つて、「はあー。」と息があ合つた。二人で顔を見合わせて、笑顔になった。お母さん、一日、おつかれさま。



「しぜんいっぱい森」版画

倉敷市立呉妹小学校 1年 竹本 潤平 (令和2年度)
木がいっぱい、しぜんがいっぱいになったらいいなと思って、つくりました。木には小鳥が休けいしに来ています。

『馬場先生』と僕

新田中学校 二年

馬場 湊

ある日の夕方のことです。家で一人で勉強をしていると、誰もいないはずの廊下から足音が聞こえてきました。足音が止まって、僕が後ろを振りかえると、そこには変顔をしたお母さんが立っていました。その他にも、期末テストの一週間前

「試験の時くらい勉強しろ。全力を尽くせ。」

と言うくせに、僕の部屋に入ってきてビールを飲み、二本目を持ってこいだのなんだの言って、最後には肩をもまされました。

僕のお母さんは、保育者養成の仕事をしています。昔は幼稚園の先生をしていたので、実践的でわかりやすい授業ができると本人は言っています。提出物や課題は、他の先生よりもたくさん出すので、学生の中で「鬼ババ（馬場）」と言われ、

厳しい先生だと思われているようです。でも僕は、学生の知らない『馬



場先生』を知っています。

お母さんは、何かにつけて雑なところがあります。車の運転も荒くて、よく車をどこかにぶつけたり、こすったりして帰ってきます。僕は小さい頃に車庫でバックしているお母さんの車にはねられたこともあります。また、ご飯の分量もおおざっぱで、いつも人数より三人分くらい多いご飯が食卓に並びます。その大量のご飯を、いつも僕とお父さんと妹が全力で食べることになるのです。

でもそんなお母さんの特性が、逆にいい時もあります。物事の決断は、いつも直感なので、新しい車を買う時もめんどもなく、すぐに決まります。

このようなたくさんさんのエピソードの中で、一番印象に残っているのは、お母さんが飲み会から酔っぱらって帰ってきて、横で何かをしゃべっている酔っぱらい過ぎて、何を言っているのかわからなかったことです。だいたい飲み仲間は、同僚の男の先生達で、いつも飲み会から帰ってくると、普段はいくら飲んでも酔っぱらわないお母さんが、豪快に酔っぱらって帰ってきます。いつもそれを見ると、家族で大笑いをすると同時に、「仕事が大変なん

だな。」と心の中で思います。

しかしそんなお母さんにも、ちゃんとした一面があります。例えば、仕事スウィッチが入ると、夜遅くまで仕事をしたり、苦手な論文を一生懸命書いてります。僕の家には友達泊まりにきた時は、みんなを温泉に連れて行ってくれたり、ご飯の準備をしてくれたりして、僕や友達の前を見てくれます。

僕が幼稚園の頃は、朝が弱いのに、毎朝お弁当を作ってくれていました。今も、朝が弱い僕を、毎朝たたき起こしてくれています。部活の試合の日は、僕よりもずっと早く起きて、幼稚園の時よりも大きくなった弁当箱を、いつもぎゅうぎゅうにしてくれます。

そんなお母さんと僕の似ているところは、前向きなところです。家族の中でも僕とお母さんは特に明るく前向きで、何かに失敗したとしても、テストの結果がどんな結果であっても、大笑いをして励ましてくれます。いつも「次があるさ。」と、落ち込まず思えるのは、お母さんのおかげだと思っています。

感情と感覚で生きている、とにかく陽気で元気なお母さんは、なんだかんだ言って家族の中の主役です。

この前、お母さんが、

「馬場君のお母さんも、馬場さんの奥さんも、馬場さんちのお嫁さんも、どの役割もやりがいがあつて楽しいけど、やっぱり私は私だから、私にしかできない『馬場先生』はやめられないわ。」

と言っていました。僕思う『馬場先生』は、他の先生や学生と、楽しく過ごしながら、明るく前向きな保育者を育てているのではないかと思います。「次があるさ。」と、学生を励ましているお母さんの姿が、目に浮かびます。お母さんが育てた若い先生達がまた、明るく前向きな子どもを育ててくれたらいいなと思います。

お母さんには、これからも今まで通り、自分らしいお母さんであり、『馬場先生』でいて欲しいです。そして、いつか僕が大人になった時、「焼き鳥を食べながら、息子と一緒にビールを飲みたい。」というオヤジのような夢をかなえてあげたいです。

